

# 高齢者向けワークショップ型環境教育プログラムの開発と実践 省エネルギー型ライフスタイルをテーマとして -

学籍番号 1011709 氏名 来田博美  
指導教員 市川智史教授

## 1. はじめに

近年、日本も含め世界各地で、猛暑や台風の大型化などの異常な気象現象が生じている。この要因と考えられているのが地球温暖化であり、その主因とされている二酸化炭素の排出量を減らし、その濃度上昇を防ぐことが緊急の課題である。特に家庭部門の二酸化炭素排出割合は、家電製品の普及、大型化、多様化等によって、エネルギー消費が増大し、近年上昇傾向にある。そのため、家庭での省エネルギー型ライフスタイルの実践が重要となっている。

本研究では、超高齢社会を迎え、省エネルギー型ライフスタイルの実践に向けて高齢者を対象としたワークショップ型環境教育プログラムを開発、試行し、その有効性の実践的評価を行う。

## 2. 研究方法

高齢者の持つ力である「過去の経験や知恵を生かすこと」を重視し、エネルギー消費を実感できる方法を取り入れたグループワークを構成し、自発的に考え、行動に結びつけられるプログラムを作成した。(4回の試行実践を行うとともに、講演のみの場合とも比較分析を実施)

プログラム：「エコの種をとりもどそう」

ねらい： 日常生活の中での、電気使用量の変化に気づく。

日常生活の中で、自分にあった電気使用量削減方法を見つけ出す。

活動(時間)	活動内容
説明 (5分)	<学習課題の説明> 「エネルギー対策説明ボード」(資料1)を使用し、省エネルギーについて学ぶことを説明する。家庭でのエネルギー消費の削減の中で、自分たちがそれぞれ出来る方法を見つけ出すことを説明する。
活動1 (15分)	<現状の確認> グループ(6~7名)に分かれ、「間取り図・現在」(資料2)を自宅と考え、自分たちが所有している家電製品カードを並べる(JCCCAプログラム一部援用)とともに、60歳以上が1人でもいる場合は、裏返されたホワイトボードに貼られた「間取り図・過去」(資料3)に、当時の家電製品を思い出しながら並べる。 過去の暮らしで使用していた家電製品と現在の暮らしで使用していた家電製品を貼り付けたホワイトボードを並べ、比較する。
活動2 (15分)	<気づき> 各グループで現在と過去の暮らしと比較し、特に使わなくてもよいと思われる家電製品を話し合い、各人3つ選び「生活見直しシート」(資料4)に書き出す。
活動3 (20分)	<電気使用量測定体験と提案> 実際に係る電気使用量を電力計で測定するとともに、今回測定しなかったその他の家電製品の電気使用量についても提示し、工夫できることを提案する。
活動4 (20分)	<気づきの共有と認識の深化> 活動2,3から、今後自分の生活の中でどのように電気の使用量を具体的に減らすかを「生活見直しシート」に書き出し、グループ内で発表・意見交換をする。さらに全体でも共有できるようグループ代表が順に発表し、共有する。
まとめ (5分)	<総括> 活動4を全体的にまとめ、省エネルギー型ライフスタイルを意識づけ、さらなる今後の実践行動を呼びかける。

### 3. 実践結果

試行実践後、質問紙調査を行い、本プログラムを試行した4回の講座の計67人の受講者(以下「試行群」と記す)全員と、講演のみの受講者(以下「比較群」と記す)51人全員から回答を得た。

対象受講者は、試行群、比較群とも50歳未満はおらず、大半が70歳以上

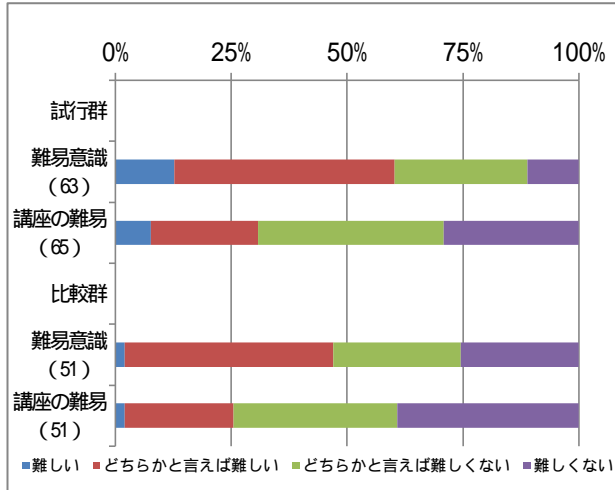


図1 難易意識と本講座の難易 (括弧内は回答数)

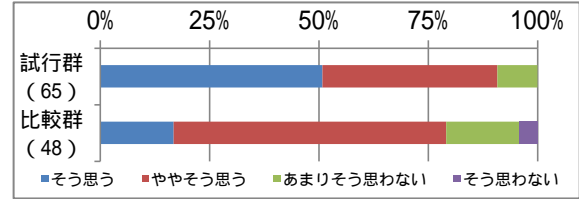


図2 家電製品の使い方に対する考えの変化 (括弧内は回答数)

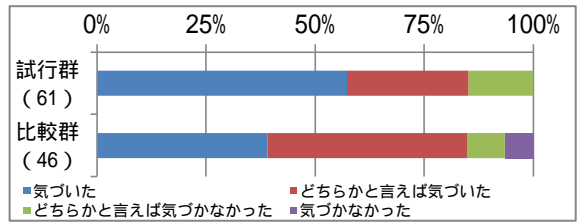


図3 電気使用量の削減方法に対する気づき (括弧内は回答数)

「講座の難易」と「環境講座の難易意識」について群ごとの比較をしたところ、カイ二乗検定の結果、試行群では有意差が認められ、比較群では有意差は認められなかった。本プログラムは、環境講座は難しいものであると考えている受講者に対しても、難しくない講座を提供し得るものであるととらえられる。

家電製品の使い方に対する「考えの変化」についても有意差が認められた。考えが変わった理由を見ると、試行群では「無駄な電気を使っているとわかったから」との回答数に、比較群との違いが見られる。また、電気使用量の「削減方法への気づき」についても有意差が認められた。気づいた削減方法は、比較群との違いとして「家電製品の使用方法の工夫」が多く見られた。これは、どちらも、過去の省エネルギーな生活を思い出し、電気使用量の測定や電気使用量削減方法について話し合ったことが影響していると考えられる。これらのことから、本プログラムの方が、講演のみの講座よりも考えの変化や削減方法に対する気づきを誘発しやすいものであり、電気使用量を削減しようとの方向への考えの変化を作り出したととらえられる。

### 4. 考察

活動1のグループワークにおいては、1960年代前半と現在の生活における家電製品の増加を視覚的にとらえ、電気使用量の変化を鮮明にした。また、高齢者にとっては、生活実感を伴う活動でグループワークへの積極的な参加、多くの発言があった学習状況から、ねらいは達成できたと見なし得る。ねらいについても、上述の質問紙の結果分析より、達成できたものと考えられる。

全体構成上は、活動1、2、3で多様な気づきを現出させ、活動4へ展開できた。しかし、自分の生活の中でどのように電気の使用量を具体的に減らすかを「生活見直しシート」に書き出す点において、課題が生じた。特に高齢者の場合、意見やアイデアを出し、話し合うことが重要であるとともに、その内容を受講者の手元に残すことも必要であるので、今後は両者のバランスのとれた方法を創り出していかなければならないと考える。